

【実践報告】

「自然体験学習」が看護学部学生の社会人基礎力に及ぼす有効性の検証

Verifying effects of outdoor education on fundamental competencies for working persons of tertiary-level nursing students

鈴木 良美 平田 松吾 市山 陽子
其田 貴美枝 西崎 未和 高木 廣文

Yoshimi SUZUKI, Shogo HIRATA, Yoko ICHIIYAMA
Kimie SONOTA, Miwa NISHIZAKI, Hirofumi TAKAGI

要 旨

【目的】本研究の目的は、東邦大学看護学部の「自然体験学習」が、学生の社会人基礎力に及ぼす効果を検証し、人づくりをめざす本学教育の成果を可視化することである。

【方法】平成26年度に自然体験学習に参加した110名を対象に、参加の前後で自記式質問紙調査を実施した。調査には、職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事をしていくために必要な基礎的な力である「社会人基礎力」の指標である、3つの力、12項目を用いた。

【結果】75名の有効回答を分析した結果、キャンプ経験のほとんどない者が半数以上であり、全国調査と比べても本学学生のキャンプ経験は少なく、自然体験学習はこれまで自然体験の乏しかった学生が自然について理解し多様な経験にチャレンジする機会を提供したと言える。

【考察】自然体験学習の実施前後を比較すると、12項目すべてが有意に向上し、さらに3つの力がバランスよく向上しており、自然体験学習は社会人基礎力の醸成に効果があると考えられる。

キーワード：自然体験学習 キャンプ 社会人基礎力 看護 学生

I. 緒言

東邦大学看護学部の一般教養科目である「自然体験学習」は、大自然の中で共同生活し、自然の厳しさ、助け合う心などを体験的に学習し、本学の建学の精神である「自然・生命・人間」に基づき、かけがえのない自然を守る心を広く身につけ医療人の基礎である人間性の向上を目的としている。東邦大学医療短期大学時代の1988年にはディキャンプ、翌年から3泊4日のキャンプを実施するようになった¹⁾。2002年に東邦大学の医学部看護学科が4年制大学となり、2011年に看護学部看護学科に改組した後も同キャンプは継続され、現在は演習科目の一つ

として位置づけられ、看護学部1年生の必修単位となっている。看護学部では、高度な知識・技術と豊かな感性を備えた人づくりをめざしており、「自然体験学習」は人づくりのための一翼を担う科目であり、大学の広報活動でも、毎年、取り上げられている。

自然体験学習に参加した教員は、学生が仲間と支えあいながら、厳しい自然環境や課題と対峙する中で、一つのチームをかたちづくり、成長していく様を目の当たりにし、この科目が人づくりに貢献していることを実感する。他方で、主観的な評価のみでは、人としてのどの部分が成長したのかなど、学生の成長の評価に限界がある。学生の人としての成長を、一定の指標を用いて可視化す

ることによって、自然体験学習での学生の経験をより客観的にとらえることができ、効果的な教育プログラムの構築のための基礎資料として活用できるのではないかと考えられる。

そこで、大学生や看護学生を対象としたキャンプなどの体験活動に関する評価についての文献検討を行ったところ、複数の論文において「社会人基礎力」に関する指標が活用されていた^{2) 3) 4)}。経済産業省によると、「社会人基礎力」とは、職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事をしていくために必要な基礎的な力のことであり、『前に踏み出す力』、『考え抜く力』、『チームで働く力』の3つの力と12の能力から構成されている⁵⁾。築山は、これら社会人基礎力の育成が、大学教育に求められる今日的課題であると述べている²⁾。また、社会人基礎力は、近年、看護基礎教育にも導入されており、箕浦によると、抽象的になりがちな養うべき態度や能力を社会人基礎力によって可視化し、指導者や学生が意識できることが、看護職の育成に有効であり必要である⁶⁾と述べている。

そこで本研究の目的を、東邦大学看護学部「自然体験学習」が、学生の社会人基礎力に及ぼす効果を検証し、人づくりをめざす本学教育の成果を可視化することとした。

Ⅱ. 方法

1. 自然体験学習について

自然体験学習は、3泊4日の日程で、山梨県北杜市の国際自然大学校を拠点に行っている。学生は、およそ10人で1グループを形成し、グループごとに現地のカウンセラーと呼ばれる指導者がつき、電気やガスのない自然環境の中で共同生活を行う。1日目はテント設営などのキャンプの準備、2日目は八ヶ岳登山、3・4日目はプロジェクトアドベンチャー（PAと呼ぶ）を行う（表1）。PA⁷⁾は米国で開発され、人の器を大きくすることを目指し、チーム・組織・コミュニティーの一員として活躍できる人材の育成を目指すプログラムである。国際自然大学校には、プロジェクトアドベンチャー専用の野外のコースがあり、アスレチックコースのような立ち木や丸太、ロープがあらかじめ用意され、グループで協力しないと達成できない課題を体験できる。学生は、アドベンチャーを通し人の本能を揺り動かしながら、体験学習という手法を使って信頼関係を構築し、チームビルディングを学ぶ。同プログラムは、現在、企業の研修や学校の校外プログラムなどとしても導入されている。

表1 自然体験学習スケジュール

	午前	午後	夜
1 日 目		11:00 日野春駅着 ウォークラリー、キャンプ場着 昼食（弁当） 開校式、オリエンテーション テント設営 夕食作り	夕食 八ヶ岳登山計画 就寝
2 日 目	起床 朝食作り 朝食、片付け 八ヶ岳登山（編笠山）	途中昼食（おにぎり、栄養調整食品） 温泉入浴 夕食（キャンプ場にて）	夕食、片付け グループタイム （登山の振り返り） 就寝
3 日 目	起床、朝のつどい 朝食作り 朝食、片付け プロジェクトアドベンチャー	途中昼食（弁当） 夕食作り （グループ別に料理を競う） ファイナルパーティー （グループ別の出し物を披露）	キャンプファイヤー 就寝
4 日 目	起床、朝のつどい 朝食作り 朝食、片付け テント撤収 プロジェクトアドベンチャー	昼食（弁当） ふりかえり、まとめ 14:30 日野春校発	

2. 対象者

2014年度に、東邦大学看護学部1年生の必修科目である自然体験学習に参加した学生110名を対象とした。

3. 調査方法

手渡しでの配票による自記式質問紙調査を、自然体験学習の前後に行った。2014年度の自然体験学習は9月2日～5日まで実施された。実施前の質問紙調査は、看護学部でオリエンテーションを行った9月1日に、調査の趣旨や個人情報の保護などを文書および口頭で説明して依頼し、同日回収した。学生には自由意思で回答してもらい、回答をもって協力に同意したものとみなした。実施後の質問紙調査は、自然体験学習最終日の閉校式の後に実施前と同様の方法で行った。

4. 調査内容

調査票には、学籍番号、性別、社会人経験、キャンプ経験、社会基礎力を含んでいる。ここで無記名ではなく、学籍番号の記載を依頼したのは、本研究は前後で評価をするため、前後のデータの比較が必要になったからである。学籍番号は前後のデータを照合後は削除して分析した。

1) 基本属性

過去の大学生を対象としたキャンプの効果などに関する文献^{3) 4)}を参考に、性別、社会人経験、キャンプ経験を確認した。

2) 社会人基礎力

経済産業省⁵⁾によると、「社会人基礎力」とは職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事をしていくために必要な基礎的な力のことであり、本研究でもこの定義を採用する。同省の示す社会人基礎力レベル評価基準表の3つの力とその下位項目である12項目に基づき、各項目のレベルを1～3段階に分けて回答を依頼した。3つの力は、『前に踏み出す力』、『考え抜く力』、『チームで働く力』で構成されている。12項目には、『前に踏み出す力』に「主体性」「働きかけ力」「実行力」の3項目が含まれ、『考え抜く力』に「課題発見力」「計画力」「創造力」の3項目、『チームで働く力』に「発信力」「傾聴力」「柔軟性」「状況把握力」「規律性」「ストレスコントロール力」の6項目が含まれている。各項目のレベルに関して、レベル1は「発揮できなかった（どうしてもできなかった）」、レベル2は「通常の状況では発揮できた（何とかできた）」、レベル3「通常の状況で効果的に発揮できた（見事にできた）」、困難な状況でもできた（とても難しかったが、何とかできた）」である。

5. 分析

IBM SPSS Statistics 22 を用いて、属性である性別、社会人経験、キャンプ経験を単純集計した。さらに、社会人基礎力に関して、3つの力、12の項目ごとに前後に分けて単純集計するとともに、Cronbach α を算出し、前後のデータについて Wilcoxon の符号付順位検定を行った。統計的検定の有意水準は0.1%とした。

6. 倫理的配慮

調査実施前に、調査の趣旨と、調査結果は学内での報告や大学の広報などで活用する予定であるが数値化されて示されるので個人情報を守られること、成績とは関係ないことを口頭および文書にて説明した。学生には自由意思で回答してもらい、回答をもって協力に同意したものとみなした。また、調査に関しては前後のデータを照合するために、学籍番号確認した。学籍番号は前後のデータを照合後は削除して分析し、個人が特定できないようにした。また、本論文の提出に際して、東邦大学看護学部倫理審査委員会の承認を得た(平成27年4月23日承認、承認番号27001)。

Ⅲ. 結果

1. 対象者の属性 (表2)

対象者110名のうち、調査票の回収数は、実施前105名、実施後110名であった。このうち前後とも欠損値がなく有効回答だったものが75名であった。75名の性別は女性

74名(98.7%)、男性1名(1.3%)、社会人経験は有2名(2.7%)、無73名(97.3%)、キャンプ経験は「何度もある」3名(4.0%)、「少しある」28名(37.3%)、「ほとんどない」44名(58.7%)であった。

2. 社会人基礎力の測定結果

1) 実施前の状態 (表3、4)

3つの力の各平均値は、『前に踏み出す力』1.97、『考え抜く力』1.89、『チームで働く力』2.06であった。3つの力の下位項目である12の項目のうち、平均値が高かったのは、『傾聴力』(2.21)であり、次いで『規律性』(2.15)、『柔軟性』(2.08)であり、これらはいずれも『チームで働く力』に含まれていた。他方で、平均値が低かったのは、『考え抜く力』に含まれる『創造力』(1.84)、『計画力』(1.87)、『前に踏み出す力』に含まれる『働きかけ力』(1.88)であった。

2) 前後の比較 (表3、4)

自然体験学習実施前後で Wilcoxon の符号付位検定を行ったところ、3つの力、12項目すべてに有意差が認められ ($p<0.001$)、実施後の方が平均値が上昇していた。『前に踏み出す力』は実施前の平均値1.97から実施後は2.49となり、『考え抜く力』は実施前の1.89から実施後は2.49に、『チームで働く力』は2.06から2.6へと上昇していた。

Ⅳ. 考察

1. キャンプ経験の乏しい本学学生

回答者の属性をみると、女性で社会人経験のないものが多く、これらは看護学部学生の特徴を示していると考えられる。回答者のキャンプ経験は、「何度もある」3名(4.0%)、「少しある」28名(37.3%)、「ほとんどない」44名(58.7%)であり、半数以上の学生がキャンプ経験がほとんどなかった。他方で、国立青少年教育振興機構が行った「青少年の体験活動等と自立に関する実態調査 平成24年度」の結果では、高校2年生の女子を対象とした場

表2 対象者の属性

		n=75	
属性		n	%
性別	女性	74	(98.7)
	男性	1	(1.3)
社会人経験	有	2	(2.7)
	無	73	(97.3)
キャンプ経験	何度もある	3	(4.0)
	少しある	28	(37.3)
	ほとんどない	44	(58.7)

表3 自然体験学習参加前後の社会人基礎力の変化（3つの力）

							n=75	
3つの力	事前			事後			Z 値	p値*
	平均値	SD	Cronbach α	平均値	SD	Cronbach α		
前に踏み出す力	1.97	0.35	0.48	2.49	0.47	0.74	-5.9	<0.001
考え抜く力	1.89	0.55	0.64	2.49	0.47	0.77	-5.7	<0.001
チームで働く力	2.06	0.34	0.65	2.60	0.45	0.88	-5.8	<0.001
計	2.00	0.28	0.74	2.54	0.41	0.92	-6.2	<0.001

*Wilcoxon の符号付順位検定による

表4 自然体験学習参加前後の社会人基礎力の変化（12項目）

3つの力	項目	事前		事後		z値	p値*
		平均値	SD	平均値	SD		
前に 踏み 出す力	主体性	2.00	0.40	2.53	0.60	-5.14	<0.001
	働きかけ力	1.88	0.57	2.35	0.56	-4.95	<0.001
	実行力	2.04	0.53	2.60	0.57	-5.29	<0.001
考え 抜く力	課題発見力	1.97	0.49	2.45	0.58	-4.49	<0.001
	計画力	1.87	0.53	2.49	0.58	-5.13	<0.001
	創造力	1.84	0.42	2.53	0.55	-5.54	<0.001
チームで 働く力	発信力	1.92	0.61	2.39	0.59	-4.12	<0.001
	傾聴力	2.21	0.62	2.68	0.57	-4.05	<0.001
	柔軟性	2.08	0.56	2.65	0.60	-5.00	<0.001
	状況把握力	1.99	0.51	2.68	0.52	-5.93	<0.001
	規律性	2.15	0.59	2.61	0.57	-4.37	<0.001
	ストレスコントロール力	2.04	0.53	2.56	0.55	-4.90	<0.001

*Wilcoxon の符号付順位検定による

合、キャンプ経験が「何度もある」29.9%、「少しある」36.4%、「ほとんどない」33.1%であり⁸⁾、キャンプ経験のほとんどない生徒は、3割程度にとどまっていた。この調査は平成24年度の高校2年生を対象としており、この学年が現役で大学に入学した場合、平成26年度に大学1年生となり、本調査の対象学年と合致する。すなわち、同世代を対象とした全国調査と比べ、今回の回答者はキャンプ経験が乏しいと言える。これは、本学が東京都23区内にあり、多くの学生が東京都、神奈川県など緑の少なく自然に触れ合う機会の少ない都心部の出身であることが影響しているのではないかと考えられる。本学の自然体験学習は、都心部に住み、これまで自然体験の乏しかった多くの学生に、自然について理解し、都会の中では学ぶことが難しい多様な経験に挑戦する機会を提供したと言える。

2. 社会人基礎力の向上

1) 実施前の状態

自然体験学習実施前の社会人基礎力に関する学生の自己評価によると、学生は、「傾聴力」、「規律性」「柔軟性」が高いと評価しており、これらはいずれも『チームで働く力』に含まれており、本学の自然体験学習参加前の学生は、『チームで働く力』の自己評価が高い傾向にある。先行文献でも看護学校の学生を対象とした調査では『チームで働く力』の自己評価が高い傾向にあり⁴⁾、看護学生の特徴とも考えられる。『チームで働く力』は、「多様な人々とともに、目標に向けて努力する力」⁵⁾と定義されており、看護職として重要な能力であると考えられる。

他方で、社会人に求められる能力として重要であると言われているのは、一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組むことのできる⁵⁾『前に踏み出す力』である。

これらは、入職から中堅までの看護職員を対象とした先行研究では『前に踏み出す力』が高い傾向にあること⁹⁾、一般企業採用担当者を対象にした調査で、社会人基礎力の中で重要だと考える力として『前に踏み出す力』が上位となっている¹⁰⁾ことからわかる。自然体験学習実施前の調査において、本学学生の『前に踏み出す力』は決して高いとは言えない状態であった。

2) 前後の比較

自然体験学習実施前後の社会人基礎力に関する学生の自己評価を比較すると、12項目すべてが有意に向上しており、自然体験学習は社会人基礎力の醸成に効果があると言える。さらに、実施前より評価の高かった『チームで働く力』だけではなく、『前に踏み出す力』、『考え抜く力』も向上させることができた。このことから、自然体験学習では、社会人に特に必要とされる『前に踏み出す力』も含めて、3つの力をバランスよく向上できたと考えられる。それぞれの力が向上した要因について考察すると、『前に踏み出す力』については、学生は日常とは異なるガスや電気のない環境の中で、テント設営、まき割り、火おこし、登山、PAなど様々な物事に対して、失敗しつつも粘り強く取り組んだことで向上できたのではないかと考えられる。『考え抜く力』は、グループごとにカウンセラーが付き、グループや個人の目標を定めた上で、実践し、経験を振り返りながら進めたことで高められたと考えられる。さらに『チームで働く力』は、仲間とともに共同生活を行い、一つの目標に向けて取り組んだことで高められたと考えられる。

3) 本研究の限界

本研究は、自然体験学習の前日と最終日にデータを収集し、その後の経過は追っていない。先行研究によると、自然体験活動参加から1年後の調査では、「いろいろな活動に積極的に参加」するなどの行動は継続してみられるものの、実施直後に精神面で評価の高かった「我慢強くなった」という意識は1年後には薄れていた¹¹⁾。自然体験学習で得られたと自己評価した力を、今後は、看護学の講義や実習を積み重ねる中で、重層的に培い、着実に身に付けていく工夫が必要であろう。

V. 結語

自然体験学習参加者を対象に、参加の前後で質問紙調査を実施した。分析の結果、回答者はキャンプ経験のない者が半数以上であった。全国調査と比べても本学学生のキャンプ経験は少なく、自然体験学習は、これまで自

然体験の乏しかった学生が自然について理解し、多様な経験にチャレンジする機会を提供した。自然体験学習実施前後を比較すると、12項目すべてが有意に向上しており、自然体験学習は社会人基礎力の醸成に効果があると考えられる。この調査によって、本学の人づくりのためのユニークなプログラムの成果を、客観的な指標によって説明することで、説明力を増すことができたと考えられる。

参考文献

- 1) 東邦大学看護教育85周年記念誌編集委員会：東邦大学の看護教育85年のあゆみ. 250, 東邦大学看護学部, 東京, 2012.
- 2) 築山泰典, 神野賢治, 田中忠道: 大学キャンプ実習が「社会人基礎力」に及ぼす有効性の検討. 福岡大学スポーツ科学研究, 39 (1): 13-26, 2008.
- 3) 青木康太郎, 粥川道子, 杉岡品子: キャンプ体験が大学生の社会人基礎力の育成に及ぼす効果に関する研究. 北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要, 3: 27-39, 2012.
- 4) 江口達也, 池島明子, 福田芳則: 教育キャンプが参加者の社会人基礎力と生きる力に及ぼす影響－社会人基礎力と生きる力の関係に着目して－. 大阪体育大学紀要, 43: 67-76, 2012.
- 5) 経済産業省: 社会人基礎力 (<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>, 2015.3.13)
- 6) 箕浦とき子: 看護職としての社会人基礎力の育て方. 14-15, 日本看護協会出版会, 東京, 2013.
- 7) Project Adventure Japan: Project Adventure Japan (<http://www.pajapan.com/>, 2015.3.13)
- 8) 国立青少年教育振興機構: 青少年の体験活動等と自立に関する実態調査 平成24年度 (http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/84/, 2015.3.13)
- 9) 松本喜代子: 看護職としての社会人基礎力の育て方. 97-100, 日本看護協会出版会, 東京, 2013.
- 10) 経済産業省: 平成21年度就職支援体制調査事業 大学生の「社会人観」の把握と「社会人基礎力」の認知度向上実証に関する調査 2010 (http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/201006daigakuseinosyakajinkannohaakuto_ninntido.pdf, 2015.3.13)
- 11) 松本晶子, 釜本健司, 早石周平: 大学生への環境教育における自然体験活動の意義. 沖縄大学人文学部紀要, 11: 43-52, 2009.

